

石鼓文製作年代攷

——『詩經』・秦公諸器銘文との比較に於いて——

篠 田 幸 夫

序

石鼓文は発見以来内容の難解さと相俟って、製作された時代比定について多くの説が出されている。那志良は『石鼓通考』で唐から清までの諸家の説を十一に分類し、諸家の説を紹介し、自らは秦の靈公作器説を主張している。その十一説を列挙すると、(1)周文王、(2)周成王、(3)周宣王、(4)秦時代、(5)秦襄公、(6)秦文公、(7)秦穆公、(8)秦靈公、(9)漢代、(10)北魏世祖、(11)北周で、那志良は宣王作器説を支持する百十九の著述を挙げていて、これが最も多い。⁽¹⁾しかし馬衡が「石鼓爲秦刻石考」を発表し、宋の鄭樵・曾鞏が唱えた説を補強したのを契機に、現在では石鼓文が秦の作器であることはもはや異論のないことである。⁽²⁾しかしそれが秦のいつのもかということは未だ十分に議論されているとは言い難い。

石鼓文の内容の理解に関しては、マルセル・グラネー、目加田誠、松本雅明、赤塚忠等の『詩經』研究の深化で、石鼓文と『詩經』との比較研究により、今日では石鼓文のほぼ全体的な理解ができるようになった。就中赤塚忠『石鼓文の新研究』⁽⁴⁾が石鼓文のそれぞれの詩篇を農耕に関わる祭祀歌と解釈した点は注目に値しよう。

石鼓文と『詩經』との関係は、石鼓文が『詩經』を模倣したものであるとする考え方が定説化しつつあり、赤塚忠でさ

え後述する如く随所に『詩経』の影響を論じている。それは『詩経』の詩篇の成立が西周期・春秋初期にまで溯るという伝統的理解の下に導き出されたものに他ならず、議論の余地がないとは言えない。かつて論じた様に、『詩経』の詩篇は九一・一％が規則性のある押韻方法を用いており、八八・六％の句数が斉一で、九〇・一％を四字句が占め、六七・九％に疊詠形式が見られる。その中でも疊詠と呼ばれる形式は、従来単純な構成という理由のみで詩篇中最も古いとされてきたが、実は最も斉一なる押韻方法・最も斉一なる句数・最も斉一な構成からなるものである。即ち疊詠形式は、『詩経』の詩篇において最も整然とした形式であり、『詩経』における形式の完成体、すなわち最も後出の定型詩と見ることができる。かような定型詩が西周期・春秋初期に忽然と世に出現したとは到底考え難く、その母胎となる青銅器の銘文との比較により『詩経』の詩篇が現行の毛詩の如くに出揃うのは、『詩経』と表現上部分的一致が見られ、主題が『詩経』の詩篇と合致する箇所については各句の字数もほぼ四字句で一定し、押韻方法も部分的に見ると『詩経』と同一の規則性が認められる中山国器の製作時期を下ることさほど遠からぬ時期であると考えて大過なからう。⁽⁵⁾

結論を少しく先に記せば、石鼓文は決して『詩経』を模倣したものではなく、如上のような『詩経』という定型詩完成の前段階に位置付けられるもので、従来石鼓文との関係が議論されている秦公簋・新出の秦公鐘・秦公罇等とほぼ同時期、紀元前四世紀中期に成立したと考えられる。以下にその根拠を論ずることとする。

一、石鼓文の内容の検討

ここでは実際に石鼓文の内容を検討する。キーワードとなる「君子」という語を含む車工篇・田車篇・霽雨篇・汧殿篇について検討したい。車工篇の本文は

- (1) 遯車既工^A 遯馬既同^A 遯車既攷^B 遯馬既駢^B
(2) 君子鼎邐 鼎邐鼎旂^B 麇鹿速速 君子之求^B

- (3) 𦍋𦍋角弓 弓茲目寺 𦍋𦍋其特 其來趨趨^C
 (4) 趨趨𦍋𦍋 既趨既時 麀鹿趨趨 其來大次^D
 (5) 𦍋𦍋其𦍋 其來趨趨^E 射其𦍋𦍋^E

とあり、五章、各章四句、各四字句からなり、第五章だけが三句からなる。押韻はAⅡ東部、BⅡ幽部、CⅡ之部、DⅡ脂部、EⅡ侯部である。⁽⁶⁾以下に本篇の語釈を施す。⁽⁷⁾

「𦍋」は「吾」の仮借字。「工」は巧の仮借字で、『説文解字』に「巧、飾也」とある如く、車の飾り付けが整う意。「同」は小雅・吉日篇「獸之所同」の鄭箋に「同、猶聚也」とある如く、集まる意。小雅・車攻篇にも「我車既攻、我馬既同」とある。「孜」は「好」と同じ。『説文』に「美也」とあり、車の美しい様を形容する語。「駘」は『正字通』に「音與詩駟鐵孔阜之阜通。言馬肥大也」と解する如く、阜の仮借字で、馬の良く肥えた様。「君子」は『詩經』中多く祖靈・神靈を指すことが金田純一郎氏・家井真氏により既に解明されている。⁽⁸⁾本篇は赤塚忠氏が指摘するように魂祭りの詩であれば、この君子は獵場の神を指している。「鼎」は『説文』によれば員の籀文である。「員」は錢大昕は「云與員相通」と解し(張光遠所引)、『經義述聞』に「云、語中助詞」とある如く、句中の語助詞で「こーこー」と読む。「𦍋」は羅振玉が「古、獵・躡同字。古文从足从足亦無別。獵・躡・𦍋、一字」と解する如く、狩りする意。「旂」は游の省字あるいは仮借字で、遊ぶ意。「君子鼎𦍋、鼎𦍋鼎旂」は、獵場の神の來臨を願う句。「麀」は『説文』に「麀、牝鹿也」とある如く、牝鹿。「鹿」は張光遠が「雄鹿頭部有角之象形、故此鹿字特指雄鹿而言」という如く、雄鹿。「速」は『説文』に「疾也」とあり、速い意。「速速」は鹿が追われて素早く逃げ回る様。「𦍋」は『廣韻』に𦍋と同字で「馬赤色也」とある。また魯頌・閟宮篇の「享以𦍋𦍋」の毛伝に「𦍋、赤」とある如く、「𦍋𦍋」は赤赤とした様。「角弓」は小雅・角弓篇「𦍋𦍋角弓」の集伝に「角弓、以角飾弓也」とある如く、角で裝飾された弓。「弓」は馬叙倫が「蓋借爲控」と解する如く、引き絞る意。「茲」は玄の重文で、強運開が解する如く弦の省字または仮借字。「目」は以。「寺」は『金石萃編』に「當是持

字」とあるように持の省字あはいは假借字。「𨔵」は『説文』に「𨔵、古文驅从支」とある如く、驅る意。「特」は『廣雅』積獸に「特、雄也」とある如く、おすの意。「𨔵」は『説文』に「𨔵、行聲也」とあり、『玉篇』に「𨔵、走貌」とあるに拠れば、「𨔵𨔵」は鹿が追われて走り来る様を形容する語で、張光遠が「余以爲通翼、𨔵々即翼々、解爲盛貌、……此句言鹿群雜奔而來」という如く、鹿の群れが追われて奔走する様。「𨔵」は『説文』に「𨔵、走意」とあるに拠れば、「𨔵𨔵」は「𨔵𨔵」と同じく鹿が追われて走り回る様を形容する語。「𨔵」は羅振玉が「音訓、𨔵作𨔵。吳氏東發曰、𨔵作𨔵、猶𨔵之省作𨔵。張氏德容曰、𨔵部𨔵字籀文、从𨔵作𨔵。知𨔵爲𨔵之籀文」と解する如く、𨔵の籀文である。「𨔵」は『説文』に「𨔵、灰、煤也」とあり、張德容が「𨔵々、當是塵起之兒」という（強運開所引）如く、鹿が走り回って土煙が舞い上がる様。「𨔵」は衛風・氓篇「來既我謀」の鄭箋に「𨔵、就也」とある如く、就く意。「𨔵」は上文の𨔵と同じく吾の繁文あるいは假借字。「時」は是_{こゝ}。「𨔵𨔵」は玉国維・羅振玉がいう如く上文の「速速」と同意。「次」は張光遠が「次、乃造次之次、急遽兒……皆疾速之意也」という如く、鹿が追われて走り来る様。「𨔵」は郭沫若が「與上『𨔵𨔵其特』同例。徐鉉本説文特字注云『朴特、牛父也。』樸卽是朴。玉篇・廣韻均作𨔵。然此樸特二字均非牛父之意、乃因合韻之使用爲牡字義」と論ずる如く、特と同じく、おすの意。「𨔵」は高笏之が「𨔵、通續」という（張光遠所引）如く、統の假借字。「𨔵𨔵」は統統で、この句は鹿が追われて統統とやってくる意。「𨔵」は張光遠が「玉篇云、『𨔵同𨔵』、又云『𨔵亦作𨔵𨔵』、是則二字同音同義而異書。然本篇𨔵作𨔵、原應通作𨔵也。爾雅釋獸郝懿行義疏『𨔵者、説文作𨔵、云鹿之絶有力者。』と論ずる如く、𨔵の假借字で、力のある鹿の意。「𨔵」は郭沫若が「𨔵段爲獨。當指離羣而獨逸者言」と解する如く、群れから離れて単独でいる鹿を指す。

以上の語釈を踏まえてこの詩を訓読すると

- (1) 𨔵_わが車_{たぐみ}既に工_{あつま}に、𨔵_わが馬_{あつま}既に同_{あつま}る。𨔵_わが車_{あつま}既に𨔵_{あつま}しく、𨔵_わが馬_{あつま}既に𨔵_{あつま}なり。
- (2) 君子_{こじん}鼎_{かみ}に𨔵_{かみ}し、鼎_{かみ}に𨔵_{かみ}し鼎_{かみ}に𨔵_{かみ}べ。𨔵_{かみ}𨔵_{かみ}速_{そく}速_{そく}として、君子_{こじん}之_{これ}を求めんとす。

(3) 梓梓たる角弓、玃を弓き目て寺す。遯れ其の特を毆らんとすれば、其の來ること趨趨たり。

(4) 趨趨玃玃として、遯に既き時に既け。麇鹿速速として、其の來ること大に次なり。

(5) 遯れ其の櫜を毆る。其の來ること遺遺たり。其の獬蜀を射ん。

となり、その訳は

(1) 我が狩りの車は飾られて、馬も車に繋がれた。狩りの車は麗しく、馬も力に満ちあふれ。

(2) 神よさあここに狩りし、ここに狩りしここに遊べ。牝鹿牡鹿は逃げまわる。神が獲物を欲しているぞ。(さあ出陣して下さい。)

(3) 赤く輝く飾り弓、弦を引き持ち、我は牡鹿を狩らんとすれば、鹿は追われて奔り来る。

(4) 砂塵をあげて奔り来る、我のところへここへ来い。牝鹿牡鹿は全速で、追われ来るよビュンビュンと。

(5) 我は牡鹿を狩らんとすれば、追われ来るよ続々と、さてこそ大鹿打ち取ろう。

となり、詩意は猟場の神の來臨を願ひ、神が降臨してくれたので多くの獲物の中から神に捧げる犠牲の大鹿一頭を狩り捧げようというものである。これは『詩経』詩篇の例から考えると、神に扮した巫祝が神になり代わって鹿狩りを行うという模倣儀礼の詩と解釈できよう。『詩経』の狩猟儀礼の詩において例えば秦風・駉篇の第二章に「時の辰き牡を奉ず」とあるように、狩猟の開始に犠牲を神に捧げることにより豊猟を祈願する行為が謡われている。本篇の「君子之求」とは、その犠牲を神が欲している、換言すれば豊猟の祈願を受け入れようとすることを示している。狩猟は狩猟自体が目的ではなく、福本郁子氏によれば、その年の農作物の豊饒を祈願する為の呪術的行為である。福本氏は、焼畑農耕に先立って豊饒を祈願する儀礼が多く焼畑農耕民族に見られる慣行で、この農耕儀礼と同時に狩猟が行われる例が多く、狩猟が農耕儀礼の一環として完全にその中に包括されているとし、『詩経』で豊年を感謝する詩篇の中に狩猟が謡われるのは、上記の理由の他に、狩猟の獲物の豊猟が類感呪術的に大地の豊饒に繋がるからだとして述べている。(9) 石鼓文における狩猟

が福本氏の論ずる如く、農耕儀礼の一環として位置付けられることは、後述するように汧陽篇第四章の「其魚佳可、佳鯉佳鯉。可以橐之、佳楊及柳」という表現からも明白である。つまり獲物である魚を楊と柳の葉で包むという行為は、魚のもつ呪性即ち魚の多産という性質を類感呪術的に農作物に齎せようとする行為に他ならない。⁽¹⁰⁾

以上を要するにこの詩は農耕儀礼の一環として、主祭に先立つ狩猟儀礼に使用された詩で、獵場の神を祭るものである。

従来石鼓文に謡われる狩猟が史伝に見られるどの狩猟か、また石鼓文の「君子」が史伝に見られるどの君主を指すかという点が石鼓文の製作年代比定において大きな比重を占める条件であった。しかし、この狩猟が農耕儀礼の一環として位置付けられるならば、それは当然毎年行われるものであり、また「君子」が獵場の神を指す以上、それらは製作年代比定の条件たり得ないの言うまでもなからう。

次に田車篇の本文には

- (1) 田車孔安^A 鑿勒馬馬 四介既簡^A 左驂旛旛^A 右驂鍵鍵^A
 (2) 避目矐于遽^A 避戎止阼^A 宮車其寫^B 秀弓寺射^C
 (3) 麋豕孔庶^B 麇鹿雉免^B 其越又旃 其^C 轟夜^C □出各亞^B
 (4) □^B 吳^B 匭^B 執而勿射^C 多庶趨趨^D 君子卣樂^D

とある。四章からなり、第一・第三章が五句、第二・第四章が四句からなる。押韻は A 〓 元部、B 〓 魚部、C 〓 鐸部、D 〓 藥部で、第二・第三・第四章の魚部・鐸部は通韻である。以下に本篇の語釈を施す。

「田」は、畋の仮借字で獵の意。「田車」は、狩猟の車（張光遠）。「孔」は汧陽篇にも見え、甚の意。「安」は善の意（張光遠）。「鑿勒」は、錢大昕が指摘する如く『詩經』に見える「儻革」と同じで、「鑿」は『説文』に「一曰轡首銅」とあ

り、『広韻』に「鑒、蕭頭銅飾」とある如く、飾りのあるたづな。「勒」は、くつばみ。「馬」は、張光遠がその字形を「正爲描繪轡索繫之形狀也」とし、さらに小雅・蓼蕭篇の「鑿革沖沖」との近似を指摘し、「沖沖、垂飾貌（毛伝）、以形容鑿革。馬馬與此用法同、據字形含義、誠爲形容馬轡之垂飾狀也、當與沖沖義近」と論ずるように、たづなの垂れる様。「四介」は、鄭風・清人篇に「駟介旁旁」という類似句があり、毛伝に「介、甲也」とあり、馬瑞辰は「介古音如甲、故甲胄假借作介胄」という。狩猟の儀式用に飾られた四頭だての馬車。「簡」は、清人篇「駟介旁旁」の「旁旁」が「駟介」の盛んなる様を形容しているのと同様に、「四介」を形容する語である。それは車工篇「避馬既駟」の「駟」が馬のよく肥えた様を形容するものであるのと同様である。邶風・簡兮篇「簡兮簡兮」の毛伝に「簡、大也」とある如く、大きく立派な様を形容する語。「驂」は、潘廸が秦風・小戎篇「駟驪是驂」の鄭箋「驂、兩駟也」を引き、「車駕四馬、内兩馬謂之服、外兩馬謂之駟」と論ずる如く、そえうま。「旛旛」は、下文の「驪驪」に対応し馬を形容する語で、赤塚忠が指摘する如く番番の仮借または繁文で、『爾雅』釈詁に「番番、勇也」とあり、大雅・崧高篇「申伯番番」の毛伝に「番番、勇武貌」とある如く、馬の勇壮な様。「驪驪」は、健健の仮借で壮健な様（赤塚忠）。「驪」は諸家のいう如く、躋の繁文で、昇る意。「遽」は、張徳容が指摘する如く、原の原字。「戎」は、張光遠が「本詩中則引伸爲指從獵徒御之衆也」といい、戎の引伸義で衆の意と解す。戎と衆は共に冬部に属し仮借した。「止」は、行く、至る意。「陟」は、「夷（平坦）」（郭沫若）、「陸（高平地）」（潘廸）、地名（劉心源）、押韻の上から「阪」と解する説（赤塚忠）等があるが明らかにし難い。いずれにしても獵場を指す語であろう。「宮車」は、「人君乘輿」（劉心源）。「寫」は、奕の仮借字で、美盛の意（赤塚忠）。「秀」は、馬叙倫が「秀、爲擄省。說文曰『擄、引也。擄或从秀。』秀弓謂引弓也」と論ずる如く、擄の省字で、引く意。「寺」は、待の省字あるいは仮借字で、待つ意（馬叙倫）。「趨」は、同じく魚部の遽の仮借字であろう。その意味は張光遠が「爲奔逃之意則無疑」という如く、素早く逃げることに。「旃」は、同じく真部の迅の仮借字（赤塚忠）で、張光遠が驚慌疾「極言禽獸奔貌」という如く、獸が疾奔する様。「轟」は、「奔」（鄭樵）、「走」の繁文（張徳容、強運開所引）、「赴」

に解する（強運開）ものとがあるが、「𢇛」字の上に一字の欠字があるため決し難い。「夜」は、郭沫若に従い「夜」に作る。その意味は赤塚忠が『説文』の「趙、𢇛趙」を引き、同じ鐸部の趙の仮借字で、足をばたつかせて疾走する意とするに従う。「各」は、各々の意（赤塚忠）。「𢇛」は、鄭業敷が「此承上句『大車出各』而言、則亞爲次弟行也」⁽¹⁾（羅君惕所引）と論ずる如く、つぎつぎに行く様。「𢇛」は、赤塚忠が、「小児の特徴であるその頭をまげたさまの象形であって『説文』に「夭、屈也」という「夭」の字である」と論ずる。「𢇛」は、左半に衣が存しており、右半が残欠している。赤塚忠が「魚部韻の衣偏の字で、夭と熟する字は、初よりほかにない。」という。「𢇛𢇛」は、郭沫若が『説文』の「𢇛、動也」を引き「此言從獵之衆庶欣欣然喜躍」と論じ、赤塚忠が同じ藥部の躍の仮借字とするに従う。喜び飛び跳ねる様。「君子」は車工篇と同様に獵場の神を指す。「𢇛」は、𢇛の原字。「君子𢇛𢇛𢇛𢇛」とは、獵場の神が、豊獵の祈願を受け入れてくれたことを示している。この「君子𢇛𢇛」と類似した表現は『詩經』に多く見られる。例えば周南・樛木篇に「南有樛木、葛藟荒之。樂只君子、福履將之。南有樛木、葛藟荒之。樂只君子、福履將之。」とあり、「樂只君子」という表現が全章にある。これにつき家井真氏は「依代である樛木に祖靈が降臨し、子孫達に祀られてその供應を受けて、祖靈が十分に楽しんでいと言うのである。神靈が祀る側の祭祀を受けるといふ事は、それはまた祀る側の祈念を受け適えてやるといふ事でもある」と論じている。⁽¹²⁾

以上の語釈を踏まえてこの詩を訓読すると

- (1) 田車孔^{はなは}だ安^{やす}く、鑿^{てうろく}勒馬馬たり。四介^{しかい}既に簡^{かん}なり。左驂^{さんはん}旛旛として、右驂^{うさん}驂驂たり。
- (2) 避^ひれ目^めて遽^{げん}に𢇛^{のほ}り、避^ひが戎^{しゅう}阼^にに止^{とど}く。宮車^{きやう}其^{その}れ寫^えとして、弓^{きう}を秀^ひき射^しを寺^{てら}す。
- (3) 麋^{きはな}豕^し孔^くだ庶^{おほ}く、麋^{きはな}鹿^{ろく}雉^ち免^{めん}、其^{その}れ𢇛^にげ又^{また}旛^{はし}る。其^{その}の□𢇛^{はし}ること夜^{あわたた}しく、□出^おでて各^{おのおの}々^つ亞^あぐ。
- (4) □𢇛^{ようしよ}𢇛^は、執^{とら}へて射^しる勿^なかれ。多^た庶^{しよ}𢇛^{しよ}𢇛^{しよ}として、君^{きみ}子^し𢇛^{すなは}𢇛^{たの}樂^{らく}しむ。

となり、詩意は獵場の神に捧げる犠牲を狩り捕る車工篇に次いで、実際の狩獵の開始と神が豊獵の祈願を受け入れてくれ

たことを謡っている。

さてここで車工篇と田車篇とについて『詩経』との先後関係を検討する。従来石鼓文は、『詩経』を模倣したものとする説が支配的である。例えば唐蘭は石鼓文の車工篇の前四句が小雅・車攻篇の「我車既攻、我馬既同」「田車既好、四牡孔阜」を受け継いだもので、汧殽篇の「其魚佳可、佳鱖佳鯉」が小雅・采緑篇の「其釣維何、維魴及鱖」を受け継いだものであるなどの例を挙げている。⁽¹³⁾ また赤塚忠は

小雅車攻篇は整々敵壯に歌い始め、これを第二章で緩徐に承け、第三章以下では一転して「之子」を壮美に描出し、第七・八章で格調高く結んでおり、実に緩急の変化の鮮やかな傑作である。これに比較すると、車工篇の表現は朴訥であって、その朴訥という点からすれば、車工篇の方が車攻篇に先立つ作品ではないかと思われるようである。その第一が車攻篇の敵整を学び、第二章も、とくに第三章以下が車攻篇の変化ある筆致に倣おうとした跡が顕著である。ただそれは趨々・趨々・趨々などの同語重複か、其來趨々・其來大次・其來遺遺・遘敵其特・遘敵其樸のような同型表現の反復とならざるを得なかった。これは朴訥というよりは模倣者の語彙不足・表現能力の稚拙に因ると見なければならぬであろう。

と論じている。⁽¹⁴⁾ 唐蘭の見解は、『詩経』の成立年代に根拠が示されておらず、また両者の先後関係についてもその根拠が示されていない。赤塚忠が石鼓文が『詩経』の模倣であるとする根拠も再検討の必要がある。小雅・車攻篇及び車工篇と類似句が見られる吉日篇を見ると、車攻篇には

- | | | | |
|-----------------------|-------------------|-------------------|-------------------|
| (1) 我車既攻 ^A | 我馬既同 ^A | 四牡龐龐 ^A | 駕言徂東 ^A |
| (2) 田車既好 ^B | 四牡孔阜 ^B | 東有甫草 ^B | 駕言行狩 ^B |
| (3) 之子于苗 ^C | 選徒囂囂 ^C | 建旄設旄 ^C | 搏獸于敖 ^C |
| (4) 駕彼四牡 ^D | 四牡奕奕 ^D | 赤芾金鳥 ^D | 會同有繹 ^D |

- (5) 決拾既飲^E 弓矢既調^A 射夫既同^A 助我舉柴^F
 (6) 四黃既駕^G 兩驂不猗^G 不失其馳^G 舍矢如破^G
 (7) 蕭蕭馬鳴^H 悠悠旆旌^H 徒御不驚^H 大庖不盈^H
 (8) 之子于征^H 有聞無聲^H 允矣君子 展也大成^H

とあり、八章、各章四句からなる整然とした詩である。押韻は各章ごとに整っており、A 東部、B 幽部、C 宵部、D 鐸部、E 脂部、F 支部、G 歌部、H 耕部である。「我馬既同」と「射夫既同」、「駕言徂東」と「駕言行狩」、「四牡孔阜」と「四牡奕奕」、囂囂・奕奕・蕭蕭・悠悠等は、赤塚氏が模倣者の語彙不足・表現能力の稚拙に起因する同語重複・同型表現の反復と何等異ならない。つまり同語重複・同型表現の反復という観点は両者の先後関係を論ずる条件たり得ないのである。また吉日篇は

- (1) 吉日維戊^A 既伯既禱^A 田車既好^A 四牡孔阜^A 升彼大阜^A 從其羣醜^A
 (2) 吉日庚午^B 既差我馬^B 獸之所同^C 麇鹿麇麇^B 漆泪之從^C 天子之所^B
 (3) 瞻彼中原 其祁孔有^D 儻儻俟俟^D 或羣或友^D 悉率左右^D 以燕天子^D
 (4) 既張我弓 既挾我矢^E 發彼小豸^E 殄此大兕^E 以御賓客 且以酌醴^E

とあり、四章、各章六句からなる整然とした詩である。押韻は各章ごとに整っており、A 幽部、B 魚部、C 東部、D 之部、E 脂部である。ここにも「吉日維戊」と「吉日庚午」、「既張我弓」と「既挾我矢」、麇麇・儻儻・俟俟という同語重複・同型表現の反復が見られる。車工篇・田車篇の各章の句数が不揃いであるという点のみが車攻篇・吉日篇に比して表現上整齊さを欠く点である。赤塚氏が指摘する同語重複・同型表現の反復は、模倣者の語彙不足・表現能力の稚拙に因りそうならざるを得なかったのではなく、『詩経』における完成体である疊詠形式の生成過程にあると位置付けられるのである。そして車攻篇・吉日篇が車工篇・田車篇より形式上明らかに斉一であるのは、単純に両者の成立の先後関

係を示すものと考えらるべきであろう。すなわち石鼓文の車工篇・田車篇が『詩経』の車攻篇・吉日篇に先立って成立したのだと考えられるのである。

次に霽雨篇の本文は

- (1) ☐☐☐☐^A 霽雨 ☐☐ 流迄滂滂 盈漑濟濟^A 君子卽涉 涉馬☐流
(2) 汧殿泊泊^A 漑漑☐☐ 舫舟西逮 ☐☐自廐 徒馭湯湯^B 佳舟目行^B
(3) 或陰或陽^B 極深目圉^B 噴于水一方^B 勿囵囵止^C 其奔其馭^D ☐☐其事^C

とある。三章からなり、各章六句、一句五字の他各四字句からなる。押韻は A || 脂部、B || 陽部、C || 之部、D || 魚部で、第三章の之部・魚部は合韻である。以下に語釈を施す。

「癸」は、上半部が欠損しているが、郭沫若が「諦案確作癸、且与下文濟泊逮爲韻」とするのに従い癸に作る。小雅・吉日篇の「吉日維戊」の如く日を記したもの（馬叙倫）。「霽」は、靈の原字（赤塚忠）。鄘風・定之方中篇「靈雨其零」の鄭箋に「靈、善也」とあり、「霽雨」は、赤塚忠が指摘する如く吉祥としての雨。「迄」は、張光遠が『易林』の「流潦滂滂」を引き「流迄滂滂」と意味が極めて近いという。「滂」は、『荀子』富国篇「沍沍如河海」の楊倞注に「沍讀爲滂、水多貌也」とある。「滂滂」は、水流の多く盛んな様。「漑」は、郭沫若は洙の異文で「水涯也」と解し、張光遠は「音義同滿字」と解し、赤塚忠は海の異字で「深い淵」の意と解するが明らかに難い。「濟濟」は、大雅・旱麓篇「榛楮濟濟」の毛伝に「衆多也」とあり、李雲光が「美盛之義」と解する如く、水が豊富な様を形容している。「君子」は、ここでは汧水の水神を指す。「渉」は、赤塚忠が如く名詞に解すべきである。「君子卽渉」は、水神が汧水の渡し場に降臨したならばということ。「馬」は、『詩経』に於いて神または神の使者として歌われることが多く、「渉馬☐流」は、水神を迎えるための馬を対岸にまで行かせること。「汧殿」は、汧殿篇に既出。「泊泊」は、『説文』に「泊、灌釜也」とあり、張光遠は「猶汧水經雨滿注兒」と解し、赤塚忠は『管子』水池篇の「越之水、濁重而泊」を引き、水の漲る様であろうとす

る。汧殿篇の「汧殿沔沔」という類似表現から推測しても水の漲る様と解するのがよい。「漭」は、漭・漭の本字（張光遠）。『説文』に「漭、艸盛」とあり、ここでは「漭漭」は、汧水の盛大なる様（赤塚忠）。「舫舟」は、郭沫若が「竝舟也」とし、赤塚忠が「舫こそ併舟、つまり二艘だての舟の本字である。…舫を動詞に用いている」という。「廐」は地名であるが何処を指すか未詳。「徒」は、歩卒。「駸」は、馬車を引く者。「湯湯」は、那志良が「徒歩的人、與駕車的人、相繼不斷」という如く、とぎれぬ様。「佳」は、張光遠が『爾雅』积水「天子造舟、諸侯維舟、大夫方舟」の郭璞注「維、連四舟」を引き「按佳通維、連結也」と論ずる如く、繋げる意。「目」は以。「陰」は水の南、「陽」は水の北。赤塚忠が「水神の所在を求めて水流のうちに右に左に行くことをいう」と論ずるのが正しい。「極」は、郭沫若が鄭樵の「卽楫字」を引き楫の仮借字とする。「團」は、残欠しているが、前後のコンテキストから推測して、赤塚忠が享を補い、「神に飲食物をささげるをいう」とするのが正しい。一字の欠字は、秦風・兼葭篇に「所謂伊人、在水一方」とあるのにより「在」を補う（赤塚忠）のが妥当であろう。「勿囿勿止」は、那志良が近人の説として「此必爲『勿□勿止』無疑。特與止對文之字、未敢意必」といい、類似表現は呉人篇に「勿竈勿代」とあり、赤塚忠は欠字に「來勿」を補い、「神を招き寄せ留めおこうとして、思う通りにならぬというのが、古代の常套的な感情表現である」と論ずるに従い「來勿」を補う。「奔」は、赤塚忠が「神の意志や君の命令のままに走りめぐること」と解する。例えば金文には效尊に「夙夜奔走」、周公殷に「克奔走上下帝」とあり、白川静氏はこれらを祭事に従うことと説き、「奔走」は祭祀用語であるとする。⁽¹⁵⁾「敵」は、赤塚忠のいう如く禦の仮借字で、『説文』に「禦、祀也」と解する。「事」は、『尚書大伝』の「天子有事」の鄭玄注に「事、謂祭祀」とある如く祭祀する意。

以上の語釈を踏まえて訓読すると

- (1) □□□□ 癸（の日）に、雷雨□□□□ たり。流沔滂滂として、淇に盈ちて濟濟たり。君子渉に卽けば、馬を渉して流を□。
- (2) 汧は汧汧として、漭漭□□。舟を舫べて西のかたに速ばんとし、□□廐自りす。徒駸湯湯として、舟を佳げて目て行

く。

(3) 或いは陰に或いは陽に、深みに極とりて目て圍すれば、水の一方に「在」り。

〔來〕かんすべ勿く止めんすべ「勿」し。其れ奔り其れ敵めて、□□其れ事る。

となり、詩意は赤塚氏が「靈雨篇は、水神を祭る詩なのである。第一句から第六句までは、雨の吉祥を得て祭礼に出発するさまを叙し、第七句から第十二句までは水上の祭りの位置につくことを叙し、そして十三句以下に水神に祭礼をいたすことを述べているのである」と論じており、第三章の記述から水神の降臨を祈願する詩であることは明らかである。靈雨篇を理解するために、赤塚氏も水神の降神歌であり本篇と主題が完全に一致する秦風・蒹葭篇を挙げている。蒹葭篇には「蒹葭蒼蒼、白露爲霜。所謂伊人、在水一方。遡洄從之、道阻且長。遡游從之、宛在水中央。蒹葭萋萋、白露未晞。所謂伊人、在水之湄。遡洄從之、道阻且躋。遡游從之、宛在水中坻。蒹葭采采、白露未已。所謂伊人、在水之涘。遡洄從之、道阻且右。遡游從之、宛在水中沚」とあり、詩の解釈は赤塚論文に詳しいので省略するが、三章疊詠形式である点は見逃すことはできない。この蒹葭篇と靈雨篇との先後関係について同氏は「前者（蒹葭篇）の方が形式単純であって、後者（靈雨篇）よりも古いと考えられるかも知れないが、にわかに断定することはできないであろう。靈雨篇がいつそう複雑であるかに見えるのは、公的儀礼の詩であるからであって、詩的表現の技巧から見れば、蒹葭篇の方が象徴化が進み、はるかに洗練されている。」と論じている。「公的儀礼の詩」とするのは「君子」を君主ととらえたための誤りである。本篇の「君子」が水神を示すことは、蒹葭篇の「所謂伊人」が水神を指すものであることからも一層理解できよう。赤塚氏が象徴化が進みはるかに洗練されているというのは、疊詠形式を指すものであるが、これは前述したように『詩経』の中で最も斉一なる押韻方法であり、最も斉一な句数であり、最も斉一なる構成なのである。即ち疊詠形式は、『詩経』の詩篇において最も整然とした形式であり、『詩経』における形式の完成体すなわち定型詩なのである。もし靈雨篇が蒹葭篇を模倣したものであるならば、すでに疊詠形式も完成しており、当然その形式をも模倣できたはずである。しかしながら靈

雨篇をはじめ石鼓文十篇の中には疊詠形式は一か所も見られない。したがって霑雨篇は、兼葭篇を始めとする『詩經』を模倣したものではあり得ないのである。

続いて汧殿篇について考察する。汧殿篇には

- (1) 汧殿沔沔^A 烝皮淖淵^A 鰕鯉處之^B 君子漫之^B
 (2) 溝又小魚^B 其旂趨趨^B 帛魚鱗鱗 其鑿罕鮮^C 黃帛其鱗^C
 (3) 又鱗又鯢^C 其胡孔庶^B 鸞之鸞鸞 汪汪趨趨^B
 (4) 其魚佳可 佳鱗佳鯉 可以橐之^D 佳楊及柳^D

とあり、四章からなり、第二章が五句、他は四句、すべて四字句からなる。押韻はA || 真部、B || 魚部、C || 元部、D || 幽部である。以下に語釈を施す。

「汧」は、水名。『説文』に「水出扶風汧縣西北入渭」とあり、『水經注』に「水出汧縣之蒲谷鄉弦中谷、決爲弦蒲藪。…水有二源。一水出縣西山、世謂之小隴山、巖嶂高險不通軌轍。…其水東北流、歷澗注以成淵。…汧水又東會一水。水發南山西側。俗以此山爲吳山。三峰霞舉疊秀雲天崩巒傾返山頂相揖望之恒有落勢。地理誌曰吳山在縣西、古文以爲汧山也」とある。「殿」は、劉心源が「殿、舊讀『也』。案秦刻石『其於久遠也』、秦權『也』作『殿』。自是『殿』『也』通用」と論ずる如く、也の仮借字。「也」は『古書虛字集釈』に「也、一爲句中助語而表提示之詞」とある。なお『爾雅』积水の「殿出不流」およびその郭璞注「水泉潛出、便自停成汚池」を根拠に「殿」を池に解する（羅振玉）ものがあるが、下文の「沔沔」が満々と流れる流水の形容であることから文意が通じない。「沔沔」は、流水の形容詞で満々と流れる意。鴻雁之什・沔水篇の「沔彼流水」の毛伝に「水流滿」とある。「烝」は、重文符号が付いているようにも見えるが、とりあえず郭沫若等にしたがって重文符号はないものとしておく。「皮」は、彼の仮借字または省字。形容詞の語尾で「烝皮」は烝烝と同じ。「烝」は、『爾雅』釈詁に「烝烝、作也」とあり、郭璞注に「皆物盛興作之貌」とあり、魯頌・泂水篇の

「烝烝皇皇」の集伝に「烝烝、盛也」とある如く、渚淵の水面が盛んに蠢く様。「渚」は、郭沫若は「渚、當是清澄之意」とし、赤塚忠は「渚は『説文』に「泥なり」とあるが、文意に合しない。：馬氏は『説文』の「渚は著大なり」によつて、渚の仮借としている。これによるべきである」とするが、汧水が黄土高原に位置することから考えて『説文』に「泥なり」とある通り泥の意であらう。「鰕」は、『説文』に「鮓也。从魚晏聲。（鰕）鰕或从匚」とある。段玉裁は『爾雅』積魚に「鰕、鮓」とあり、小雅・魚麗篇の毛伝に「鰕、鮓也」とあるのにより、『説文』の「鮓也」は「鮓也」の誤りで妄人が改めたものとする。和名ナマズ（江村如圭）。「君子」は、ここでは汧水の女神あるいは祖霊を指す。「濩」は、羅振玉が論ずる如く漁の別体または繁文で、捕る意。「濩」は、渡ることができる深さ、浅瀬の意。「呉氏東發釋濩、即説文砮之或體。段氏彭壽曰、説文粗糲・蚌螭字皆从萬。今隸从厲、是其證」（羅振玉所引）とあり、『集韻』に「螭、或作螭」とあり、段注に「糲、今皆作糲」とあるによれば、萬と厲が通仮し、「濩」は濩の仮借字あるいは省字。「濩」は、『説文』に「砮、履石渡水也。从水从石。詩曰深則砮。砮或从厲」とあり、段注に「履石渡水、乃水之至淺」とある如く、水深の浅い意。「又」は、有の仮借字あるいは省字。「旡」は、游の仮借字または省字。邶風・谷風篇の「泳之游之」の毛伝に「浮水曰游」とあり、『方言』の「潛、又游也」の郭璞注に「潛行水中亦爲遊也」とある如く、泳ぐ意。「趨趨」は、諸家は南有嘉魚篇の「南有嘉魚、烝然汕汕」を引き、『説文』に「汕、魚游水貌」とあるにより、魚の泳ぐ様と解し、あるいは『広雅』釈詁に「罩罩、滄滄、衆也」とあり、『広雅疏証』に「案、罩罩汕汕、羣游之貌、滄滄與汕汕同」とあるにより、魚の群游する様と解していた。趨・汕・滄はみな元部心母で仮借した可能性はある。しかし李鐵華が散の繁文とし、四方に散らばる様子と解するのがよい。「帛」は、白の仮借字または伯（大きい）の仮借字。「𩺰」は、𩺰の仮借字あるいは繁文。「𩺰」は、張光遠が「解作光明貌。鼓勒白魚𩺰𩺰句、即謂白色之魚、游於水中、光亮閃𩺰也」、李鐵華が「魚罔中魚鱗閃𩺰」、赤塚忠が「𩺰𩺰は魚鱗の水中に閃く様をいうのであらう」とする如く、水中で魚鱗の白く光り輝く様。「𩺰」は、赤塚忠が「盜を音としていることは明らかであるから、その音に因って推せば、跳とはなはだ近く、また躍、蹕に近い。

つまり、跳の仮借で、躍動する意と解するべきであろう」と論じている。「𩺰」は、『説文』に「至也」とある如く、いたって、甚だの意。「𩺰」は、張光遠が「余以爲𩺰與麗可通同、麗、古文有麗・麗、从鹿麗聲。𩺰當即从魚、𩺰聲。…麗、麗、儼皆一義、解作偶也、並也」と論ずる如く、白や黄色の魚が並び泳ぐ様。「𩺰」は、和名「をしきうお」（岡元鳳）。「𩺰」は、従来音はハクで鮑の異体字されてきたが、羅振玉は「綿省聲」とし、「鮑」とは別の魚と解し、明らかにし難い。「𩺰」は、赤塚忠が「立の原字形は人が地上に大手を払げて立っているさま（企）に象り、人が大手を払げたさま（𠂔）に象るに類似している。すなわち、𩺰は大を誤って立に書いたもので、夜（𠂔）字に他ならない。…腋の原字で、…ここは同音の繹、突に仮借されており、魚の相続く意である。」と論じている。「𩺰」以下の二句は下句の「其魚佳可」から推して、その前段階である魚を捕る様子を述べたもの。「𩺰」は、赤塚忠が攀の仮借字とし、めぐらす意、人々が相連なって囲み魚を捕る意とするのがよいであろう。「𩺰」は、『説文』に「翼、獸也。似牲牲从𩺰夫聲」とあるが、羅振玉が「許書翼字、疑即石鼓𩺰字、後人傳寫之誤」というに拠れば、「史」が音である。呉廣霈は「似同駛駛之意」と（羅君惕所引）述べている。「駛」は、『廣雅』釈詁に「疾也」とあり、「駛駛」は、魚を取り囲む動作が速い様。「𩺰𩺰𩺰𩺰」は、魚の行動と見るか、魚を捕る人の行動と見るかにより解釈が分かれる。前者は赤塚忠が「𩺰𩺰」を迂迂の仮借で、勢いよく突き進む様、「𩺰𩺰」を逋逋の仮借で、逃げ回る意と解する。また張光遠は「𩺰」を段の仮借で「魚羣多見」、「𩺰」を過の仮借で「往來頻數」と解す。後者は郭沫若が「𩺰」を趕の仮借で、追う意、「𩺰」を赴の仮借で、走る意と解す。また羅君惕は「𩺰」を汗の仮借で「汗多也」、「𩺰」を「蓋往來奔走之意」と解するが、明らかにしがたい。「可」は諸家が解する如く何の仮借字あるいは省字。「𩺰」は齊風・敝笱篇「其魚魴𩺰」の毛伝に「魴𩺰大魚」、鄭箋に「𩺰似魴而弱鱗」、集伝に「𩺰似魴厚而頭大。或謂之𩺰」とあり、岡元鳳は和名「タナゴ」とするが未詳。「𩺰」は、段玉裁が「讀如苞苴之苞」とし、潘迪が「包裹承藉之義」とする（郭沫若所引）のが正しく、包む意。魚を楊柳の葉で包むことの意義は、群游する魚の繁殖能力の旺盛なことに注目し、その繁殖能力にあやかって類感呪術的に農作物の豊饒を祈願するものにほかならな

以上の語釈を踏まえて訓読すると

(1) 汧は汧汧として、烝皮たる淖淵に、鰕鯉之に處り。君子之を濩せんとす。

(2) 漚に小魚又り、其の旂ぶこと趣趣たり。帛魚鱗鱗として、其の鑿ること卒だ鮮やかなり。黄や帛や其れ鱗たり。

(3) 鰕又り鯉又り、其れ胡として孔だ庶し。之を櫛すること壘壘として、沆沆趣趣たり。

(4) 其の魚は佳れ可ぞ、佳れ鰕と佳れ鯉なり。可を以て之を櫛まん、佳れ楊と柳となり。

となり、詩意は汧水の多漁を讃え獲物を神霊に捧げ、さらに魚の呪力を農作物に添加しようとするものである。「君子濩之」は、車工篇の「君子之求」と同様の発想で犠牲を捧げることである。魚が犠牲として捧げられる例は、周頌・潛篇に「猗與漆沮、潛有多魚、有鱣有鮪、鰈鰒鰕鯉、以享以祀、以介景福」とあり、これによれば魚を捧げることが「以て景福を介む」ためであることが理解されよう。

さて本章で考察した雷雨篇は、水神を招く降神歌で、汧陂篇は魚の呪力を農作物に添加する歌、即ち春の予祝儀礼歌であった。また車工篇は猟場の神の来臨を願い、神が降臨してくれたので、多くの獲物の中から神に捧げる犠牲の大鹿一頭を狩り捧げるというもので、田車篇は実際の狩猟の開始と神が豊猟の祈願を受け入れてくれたことを謡ったものである。どれも農耕儀礼の一環として位置付けられるものであるが、鹿狩りと獲魚は一篇の詩の中で同時に謡われることはなく、本稿では紙幅の都合で考察できなかったが、鑾車篇も鹿狩りを題材とした予祝儀礼歌であり、石鼓文には鹿狩りを題材とした詩篇が三篇存している。これらの三篇は、鹿狩りの儀礼歌であり、そこに他の儀礼は謡われていない。ところが『詩経』にはこれらと異なり狩猟と魚、あるいは鹿や他の獣と魚が同時に謡われているものがある。例えば大雅・韓奕篇第五章に「蹶父孔武、靡國不到。爲韓姑相攸、莫如韓樂。孔樂韓土、川澤訐訐。魴鰕甫甫、麀鹿薿薿。有熊有羆、有貓有虎。慶既令居、韓姑燕譽」とある。この「魴鰕甫甫」について赤塚忠は「麀鹿などの狩猟の獲物とともに国土の美を形容する

一景物になっている。同様な觀念は汧殽篇にもあつて、小魚、帛魚の衆多を讃ている」とする。しかし、前述した如く、汧殽篇の多魚は、類感呪術的に大地の豊饒を齎さんとする願望の表出であり、国土の美を形容する一景物としての性格などはないのである。同氏自身が「祭礼が慣例になると、慣例そのことが重要となつて、その本義が忘れられる。…汧殽篇は「可以橐之」になお呪術的意義を濃厚に保存しているものであつた」と指摘する如く、韓奕篇の魚には汧殽篇における魚の概念がもはや忘却されている。つまり獲魚儀礼の本義が忘れられたために、石鼓文では別々の儀礼として謡われている。麇・鹿・熊・羆、猫・虎等の獣と魴・鰾という魚類がここに混在するに至つたのである。また小雅・無羊篇に「誰謂爾無羊、三百維羣。誰謂爾無牛、九十其牝。爾羊來思、其角濈濈。爾牛來思、其耳濕濕。或降于阿、或飲于池、或寢或訛。爾牧來思、何蓑何笠。或負其餼、三十維物。爾牲則具、爾牧來思。以薪以蒸、以雌以雄。爾羊來思、矜矜兢兢、不騫不崩。麾之以肱、畢來既升。牧人乃夢、衆維魚矣、旒維旗矣。大人占之、衆維魚矣、實維豐年。旒維旗矣、室家溱溱」とあり、前半で犠牲である羊・牛・特(牛)が謡われ、最終章で、衆魚により豊年を祈念することが謡われている。これも獣と魚類が混在している例である。また小雅・采芣篇第三、四章に「之子于狩、言韞其弓。之子于釣、言綸之繩。其釣維何、維魴及鰾。維魴及鰾、薄言觀者」とあり、狩りと釣りが混在している。唐蘭は汧殽篇の「其魚佳可、佳鰾佳鯉」がこの「其釣維何、維魴及鰾」を継承したものと位置付けているが、汧殽篇の「可以橐之、佳楊及柳」という呪的表現はもはや見られず、継承関係があるとすればむしろ采芣篇が汧殽篇を継承したものと考えざるを得ない。そして同・靈臺篇第三章に「麇鹿濯濯、白鳥嚮嚮。王在靈沼、於物魚躍」とあり、同様の混在が認められる。これらは狩猟儀礼と獲魚儀礼の本義が忘れられたために両者が混在するに至つたと考えられる。したがって石鼓文が『詩經』を模倣したする考え方が成立し得ないこと、石鼓文が『詩經』に先立って成立したものであることが理解できよう。

石鼓文との関わりが従来から議論されている秦公簠・秦公鐘（宋刻）・秦公鐘（一九七八年出土、同出の秦公罍は同銘）について考察する。秦公簠は一九二〇年頃に甘肅省天水付近で出土したと伝えられているが、その銘文に

(一) 秦公曰、不顯朕皇且^A、受天命^B、鼎宅禹賁。十又二公、才帝之祚^A、嚴覲賁天命^B、保龔厥秦^B、號事繇夏^A。

(二) 余雖小子^C、穆々帥秉明德^D、刺々趨々、萬民是敕、咸畜胤士^C、黠々文武、鎮靜不廷、虔敬朕祀^C。

(三) 乍^A宗彝、以邵皇且^A。其嚴歸各^A、以受屯魯多釐^C、眉壽無疆^E、眈寔才天、高弘又慶^E、竈囿四方^E。宜

とあり、押韻は A || 魚部、B || 真部、C || 之部、D || 職部、E || 陽部、第二章之職は通韻、第三章魚之は合韻である。秦公鐘の銘文に

(一) 秦公曰、我先祖受天命、賞宅受國。刺刺邵文公靜公憲公^A、不豸于上^B、邵合皇天、以號事繇方^B。

(二) 公及王姬曰、余小子^C、余夙夕虔敬朕祀、以受多福^D、克明又心。黠猷胤士^C、咸畜左右^C、黠々允義。

(三) 冀受德明、以康奠協朕國^D、監百繇、具卽其服^D。

(四) 乍^A阜繇鐘^A、憲音缺缺離離^A、以匱皇公^A、以受大福^D、屯魯多釐^C、大壽萬年。

(五) 秦公罍眈綸在位、膺受大命、眉壽無疆^B、匍有四方^B、貽康寶。

とあり、押韻は A || 東部、B || 陽部、C || 之部、D || 職部で、第一章の陽東は合韻、第二章・第三章之職は通韻である。

両者は一々指摘しないが、類似表現が多く、内容・字体・押韻等が類似しているため同一時期の作器と考えられる。⁽¹⁹⁾ 秦公簠の「十又二公」が史伝に現われるどの君主を指すかを比定することにより、作器時期が推定され、これまでに宣公・成公・穆公・共公・桓公・景公等の春秋期製作説が出されている。⁽²⁰⁾ 秦公鐘（宋刻）もほぼ秦公簠と同内容で、同じく銘文に

「十又二公」の句がある。最近では張政烺氏が、

秦公鐘、秦公簠銘の十又二公当是虚数、下面可增、上面同斫、并不是实有所指的、对考证作器者的年代没有什么意义。

と述べ、十二公と作器者とは関連がないとする注目すべき説を出している。⁽²¹⁾ 十二という数は曆法・『左伝』と深く関わる数字であるが、近代になり曆法計算が戦国中期紀元前四世紀になって始まったことが新城新蔵・飯島忠夫により明らかにされている。⁽²²⁾ さらに新城新蔵は『左伝』の木星の記事と予言の適不適から、『左伝』が整理されたのは紀元前三六五年から紀元前三三〇年の間であると推測し、⁽²³⁾ それに拠り平勢隆郎氏は、『春秋』『左氏伝』等の文献と銘文との比較研究により、秦公簋・秦公鐘（宋刻）・秦公鐘（出土）の作器者として戦国中期の孝公・恵文君を想定している。⁽²⁴⁾

秦公簋・秦公鐘（宋刻）・秦公鐘は従来春秋後期の作器とされてきたが、張政烺氏・平勢氏の研究に拠れば、銘文に特別な意味を持つ「十二」また文武の胙に関連する内容がある等の理由により、これらの作器時期は秦恵文君四年（紀元前三三五年）の式典に関わっていると見ざるを得ないであろう。

続いてこれら秦公の諸器と石鼓文との関係を検討する。羅振玉は「此簋書体与岐陽石鼓文甚相類、而與其他吉金文字殊。：書法字体纖悉不殊。惟石鼓結字較斂、而此稍縱耳。」⁽²⁵⁾ といひ、王国維は「秦公敦跋」で「字跡雅近石鼓文、金文中與石鼓相近似者、惟虢季子白盤及此敦耳。」⁽²⁶⁾ と述べ、また陳昭容氏は秦公簋・秦公鐘（出土）及び秦公罍・石鼓文・詛楚文の同字比較を行い、「這些例子可以看出從秦公鐘罍銘到秦公簋銘、漢字的結構即使不變、筆畫的安排卻是朝著均勻平穩的方塊形前進、讓整個字不致左右或上下比重不均、能端正穩妥的擺成方塊的結構。及至石鼓文、這種刻意求其方整的作風更爲顯然、比起太公廟秦公鐘罍銘文筆劃結構的隨意活潑、石鼓文四平八穩的風格極爲明顯、甚至到了板滯的地步、至詛楚文已幾與小篆無異」⁽²⁷⁾ といひ、共に秦公諸器と石鼓文の類似性を論じ、両者がともに秦文化に属するものであるという点の他に、字形及び字のスタイルがその共通点として挙げられている。

しかし、字形やスタイルの類似という共通点は、常に比較の精度及び基準がない点に問題が残り、両者の先後関係を論ずる上で一つの傍証とはなるが、決定的な証拠とはなり得ない。そこで、両者の句形・押韻をここで再び取り上げてみると、秦公簋は、第一章が九句中五句押韻、第二章が八句中四句押韻、第三章が八句中六句押韻しており、全体では二十五

句中十四句押韻している。句形は三章二十五句、四字句が十九句、三字句五字句六字句がそれぞれ二句。秦公鐘は第一章が七句中三句、第二章が八句中五句、第三章が四句中二句、第四章が六句中五句、第五章が五句中二句押韻しており、全体では三十句中十七句押韻しており、句形は五章三十句、四字句が十八句、三字句が四句、六字句が三句、五字句七字句が二句、九字句が一句である。石鼓文の車工篇は全十九句中十五句押韻し、句形は三章十九句すべて四字句である。田車篇は全十八句中十七句押韻し、句形は四章十八句中、四字句が十七句、五字句が一句である。霽雨篇は全十八句中十一句（句末の欠字二句）、句形は三章十八句中、四字句が十七句、五字句が一句である。汧殽篇は全十七句中十二句押韻しており、句形は四章十七句中、すべて四字句である。つまり、石鼓文の押韻の密度が秦公簋・秦公鐘よりも高く、四字句の割合が高いのである。即ち句形・押韻法上から観ると、石鼓文は紀元前三三五年に作器された秦公簋・秦公鐘の銘文よりも完成度が高く、従って後出の作品とみなすことが出来よう。

石鼓文の主題は前章で検討した。秦公簋・秦公鐘は「秦公曰」を冠し、秦公自身の言葉としている点、石鼓文が農耕に關わる模倣儀礼の詩である点は両者の異なる点である。また秦公簋・秦公鐘の主題は先祖の受命から説き起こし秦公簋の「以受屯魯多釐、眉壽無疆、眡寔才天、高弘又慶、寵囿四方」、秦公鐘の「以受多福、克明又心。鑿龢胤士、咸畜左右、鑿々允義。冀受德明、以康奠協朕國、鑒百繒、具卽其服」「以受大福、屯魯多釐、大壽萬年」「秦公賁眡齡在位、膺受大命、眉壽無疆、匍有四方」は、祖靈に対する報告と繁榮の祈求である。⁽²⁸⁾したがって少なくとも繁榮の祈求という点で両者の主題は一致する。以上のように両者には共通点と相違点とがともに存在するため、押韻・句形の比較だけで、その成立の先後關係をきめることは困難である。しかし、先述した石鼓文・霽雨篇と『詩經』秦風・蒹葭篇に就いて論じた如く、石鼓文は『詩經』の疊詠体に先立つ存在で、石鼓文が四字句を主体とする押韻密度の高い韻文であるのに比較し、春秋末期以前の銘文には、石鼓文との比較に耐え得るほど整った韻文は存在しない。以上から、石鼓文が春秋期に忽然と製作されたとは考え難いのである。

結 論

石鼓文は発見以来製作された時代比定について多くの説が出されてきたが、馬衡の「石鼓爲秦刻石考」以後、石鼓文が秦の作器であることが定説となった。しかし、それが秦のいつのものかということになると、未だ十分に議論されているとは言い難い。『詩経』研究の深化で、石鼓文と『詩経』との比較研究を行うことにより、今日では石鼓文はほぼ全体的な理解ができるようになった。就中赤塚忠『石鼓文の新研究』が、石鼓文の理解を飛躍的に進歩させ、石鼓文のそれぞれの詩篇を農耕に関わる祭祀歌と解釈した点は注目し値しよう。

本稿で考察した石鼓文車工篇は、農耕儀礼の一環として、主祭に先立つ狩猟儀礼に使用された詩で、獵場の神を祭るものであると考えられる。田車篇は、車工篇に次いで実際の狩猟の開始と獵場の神が豊獵の祈願を受け入れてくれたことを謡っている。霽雨篇は、水神の降臨を祈願する詩である。汧墜篇は、汧水の多漁を讃え獲物を神霊に捧げ、さらに魚の呪力を農作物に転化しようとするものである。『詩経』における「君子」の多くが祖霊や神霊を指すことが解明されたことにより、石鼓文四篇に見られる「君子」が、汧水の神・獵場の神を指すこと指摘し得た。

現在石鼓文は、『詩経』を模倣したものであるとする考え方が定説化しつつある。しかし両者の形式・押韻を比較すると、石鼓文が『詩経』諸篇に比して斉一さを欠くこと、また詩篇の形式の完成体すなわち疊詠形式は、『詩経』の中で最も成立が新しい可能性があり、石鼓文には同語重複、同型表現の反復という疊詠形式へ繋がるべき前段階に位置付けられる表現が見られること、石鼓文では獲魚儀礼、狩猟儀礼が別々に謡われるのに対して、『詩経』には兩儀礼が混在している詩篇が存すること、そして汧墜篇の「其魚佳可、佳鱖佳鯉。可以橐之、佳楊及柳」に見られる魚の呪性が、『詩経』詩篇ではその呪性が忘れさられ単なる一景物として謡われること等の現象があり、石鼓文が『詩経』に先立って成立したと考えざるを得ない。

また前述の疊詠形式の如き韻文の完成形態が誕生するには、無論その母胎を想定しなければならず、すでに鐘の銘文と『詩経』とを比較する研究が行われている。石鼓文の形式・押韻も疊詠形式ほどではないにしろ、章立てが可能で、四字句を中心とするかなり斉一な韻文であることは、本稿で考察した通りである。従来石鼓文と字形・文字のスタイルの類似により関連が議論されている秦公諸器は、作器者として戦国秦の惠文君（紀元前三三八―紀元前三二一）が想定される。この秦公諸器と石鼓文の押韻・句形を比較してみると秦公諸器の押韻は、石鼓文の押韻ほど密度が高くなく、章ごとの句数も石鼓文ほど斉一ではない。しかし、西周期・春秋期の銘文には、章立て・句形・押韻法等、石鼓文と比較しうる韻文がないことから考えて、石鼓文の製作が春秋期に溯らないことが理解できる。

石鼓文の製作時期は、唐蘭が、一人称が石鼓文では「遯」が十四例「余」が一例「我」が二例であり「朕」を使用しておらず、秦公鐘（宋刻）秦公簋の一人称が「朕」を用いていること、石鼓文の「四」字が「四」に作り、秦公鐘（宋刻）秦公簋が「三」に作ることから、石鼓文の製作年代が秦公鐘・秦公簋より溯ることはないと論ずる。すなわち、石鼓文の製作年代は紀元前四世紀中葉以後であるとするのである。さらに鄭樵が石鼓文の語助詞「毇」が春秋期の銘文には見られず、戦国秦詛楚文・平陽斤に存在するとする指摘に加え、近年出土した新郢虎符にも「毇」字が見られることを指摘し、石鼓文の製作年代が「毇」字の存するものに接近していると論じているが、秦公鐘・秦公簋の製作を秦景公期としたために石鼓文が秦献公十一年（紀元前三七四年）に製作されたものとする。

しかし、前述した如く秦公諸器の作器者として惠文君が想定されること、また『詩経』との関連から考えれば、石鼓文は紀元前四世紀中葉以降に製作されたと考えられる。

注

- (1) 那志良『石鼓通考』（中華叢書委員会、一九五八年）
- (2) 馬衡『石鼓為秦刻石考』石印本（一九三一年）

- (3) マルセル・グラネー『中国古代の祭祀と歌謡』内田智雄訳、目加誠『詩経―訳注篇』、松本雅明『詩経諸篇の成立に関する研究』、赤塚忠『詩経研究』等。
- (4) 赤塚忠『石鼓文の新研究』(赤塚忠著作集第七卷、研文社、一九八九年一月)
- (5) 拙稿「金文資料に於ける韻文の研究―『詩経』詩篇成立へのアプローチ―」(『二松学舎大学論集』三十八集、一九九六年三月所収) 参照。また家井眞氏は、疊詠形式の詩が最も新しい可能性があることを示唆している。『詩経』詩篇の成立に関する一考察―周南に就いて―(『二松学舎大学論集』三十七集所収、一九九五年三月)を参照。
- (6) 押韻は王力『詩経韻讀』(王力著作集 第六卷所収)に拠る。
- (7) 語釈の出典を列挙する。羅振玉『石鼓文考釋』一九一六年、馬敘倫『石鼓疏証』(上海商務印書館、一九三五年)、郭沫若『石鼓文研究』(北京人民出版社、一九五五年)、張光遠『先秦石鼓存詩考』(台灣出版、一九六六年)、羅君揚『秦刻石考釋』(齊魯書社、一九八三年)、鄧散木『石鼓辭釋』(中華書局、一九八五年)、李鐵華『石鼓新響』(三秦出版社、一九九四年)、赤塚忠『石鼓文の新研究』(赤塚忠著作集第七卷所収、研文社、一九八九年)、馬瑞辰『毛詩伝箋通釈』(中華書局、一九八九年)、江村如圭『詩経名物辨解』(『詩経動植物図鑑叢書』下巻所収、大化書局、一九七〇年)、岡元鳳『毛詩品物図攷』(『詩経動植物図鑑叢書』下巻所収)。
- (8) 金田純一郎「白馬と賓客―有客、白駒の詩をめぐる―」(『京都女子大学文学部紀要』第一七巻所収、昭和三十三年)、家井眞『詩経』に於ける「君子」に就いて―祖靈祭祀詩を中心として―(『二松学舎大学東洋学研究所集刊』平成七年度所収、一九九六年) 参照。
- (9) 福本郁子『詩経』に於ける「草木伐採」の興詞に就いて(『日本中国学会報』第四十六集所収、一九九四年十月)。
- (10) 家井眞『詩経』に於ける魚の「興」詞とその展開に就いて(『日本中国学会報』第二十七集所収、一九七五年十月) 参照。
- (11) なお「夜」を「大」に作り、欠字を「車」に作ること及び斷句は異なる。
- (12) 前掲注(8) 家井論文参照。
- (13) 唐蘭「石鼓年代考」七頁(『故宮博物院刊』第一期所収、一九五八年)。
- (14) 前掲注(4) 赤塚論文八六二頁。
- (15) 白川静『字統』参照。
- (16) 家井眞『詩経』に於ける渡河の「興」詞とその展開に就いて(『二松学舎大学論集』昭和五十二年度所収)。
- (17) 前掲注(10) 家井論文参照。
- (18) 前掲注(13) 唐蘭論文参照。
- (19) 「伍仕謙「秦公鐘考釋」一〇五頁(『四川大学学报』一九八〇年二期)。
- (20) これらの説は陳昭容「秦公盨の時代問題、兼論石鼓文的相对年代」(『中央研究院歷史語言研究所集刊』第六十四本所収、民国八十二年十二月)に纏められている。
- (21) 張政烺「十二公及其相關問題」一九一頁(『紀念顧頡剛論文集』所収、巴蜀書社、一九九〇年)。
- (22) 新城新蔵『東洋天文学史研究』五七二頁―五七三頁(弘文堂、一九二八年九月)、飯島忠夫『支那曆法起源考』二四四頁―二五四頁(恒星社、一九三〇年一月)。

- (23) 注(22) 前掲書三九六頁。
- (24) 平勢隆朗『新編史記東周年表』三四頁―五二頁(東京大学出版会、一九九五年十二)。
- (25) 『貞松堂集古遺文』卷六。
- (26) 『觀堂集林』所収。
- (27) 注(20) 前掲書一〇九九頁。
- (28) 白川静氏は、「才天」の主語が祖靈であると指摘している(『金文通釈』第三十四輯)。
- (附記) 本稿は平成八年度文部省科学研究費による「青銅器銘文に於ける韻文と石鼓文の研究」の研究成果の一部である。